

『平治物語』常葉譚考

日 下 力

古来、人々から愛好されてきた常葉御前の哀話は、『平治物語』とは別個に成立し、享受されていたと考えられる。私は旧稿「初期平治物語の一考察」(『軍記と語り物・7』昭45・4)でそのことを示唆したのであったが、それに数カ月先立って、笠米治氏「平治物語第一類本と第四類本の間」(『長崎大学教養部紀要・10』昭44・12)も、同意見を示されていた。その後、私の見解として賛同を得ているようであり、近年では鈴木淳一氏「『平治物語』常葉説話覚え書——その伝承の問題——」(『北海道説話文学研究會編『中世説話の世界』笠間書院・昭54)が積極的に肯定した上で、立論されている。³しかし、この見解はいまだ本格的な論証を経っていないため、本稿では、古態本たる学習院本⁽³⁾(九条家旧蔵)の分析を通して、それを検証し、かつ、常葉譚自体の成立に関する一仮説を提示してみたいと思う。

一

古態本に含まれる常葉譚は、四つの部分から成り立つ。(一)夫君

義朝の敗北の報を受く、(二)義朝暗殺の報を受く、(三)都落ち、四六波羅出頭、の四箇所であり、(一)(二)(三)は中巻、(四)は下巻にある。最初に、(一)における導入の文面に注目していただく。

(A)さても、左馬頭義朝が末子共三人あり。九条院雑仕常葉が腹也。(B)兄は今若とて七になる。中は乙若とて五になる。末は牛若とてことし生たる子也。

便宜上(A)(B)の符号を付したが、その(A)は、(三)四の冒頭に各々、「此外、九条院雑仕常葉が腹に子供三人あり」、「さても、九条院雑仕常葉腹、義朝が子供三人あり」と繰り返され、(B)も(三)(四)の各導入部に近接して、「いかにいわんや、はかなげなる子供三人あり。兄は八、中は六、末の子は二歳也」、「兄は今若とて八になる。中は乙若とて六、末は牛若とて二歳也」(年が改まり、一歳ずつ増えている)と、反復される表現である。このことは笠氏以来指摘されているが、更に、(二)の上掲(B)相当文の後には(C)「三人ながら男子なれば、とり出されて、又うきめをやみんずらむ」という一文があり、それも(三)四の各(A)相当文に続く「おさなければども

みな男子なれば、さてはあらじ物を」、「皆男子なれば、たゞは置がたし」と氣脈を通じる。要するに、(一) (A) (B)、(二) (B) (C)、(三) (A) (C)・(B)、(四) (A) (C) というふうな、三つの表現が、四箇所にわたって、三回つづ、繰り返し使われているという結果になるのである。しかも、その四箇所とも、四分割されている常葉譚の各々の発端部に属する。となれば、常葉の話を始めるに際しては、上掲の三つの表現を折りまぜた導入の仕方、つまり、「九条院雑仕常葉腹」に義朝の「子供三人」がいたと切り出し、次いで子供の名と年齢の紹介の後、三人とも「男子なれば」命が危ういと続けていく語り口が、一つの定形として定着していたことを思わせる。この語り口の反復は、そういう導入に始まる独自に存在した常葉の物語を、『平治物語』が未調整なままに取り込んだために、取り残されてしまった現象と推測されよう。或いはまた、特に(三)(四)の部分は、それぞれが起承転結の整ったまとまりを見せており、独立して享受されうる形態となつてゐるところから推測を重ねれば、常葉の物語が独立した複数のパーツから成り、そのいずれもが同じような導入に始まる語り物であつたことの痕跡であるのかも知れない(語り物としての可能性は後述)。ともあれ、常葉母子の哀話が、子供達の年齢と生命の危険を前面にたてて語り出されるものであつたらうことは、我が子の命にかける苦汗に満ちた母の愛をテーマとして展開するこの話にとって、誠にふさわしい導入方法ではあつた。

○ 常葉の話を独立譚として措定するには、今一つ重要なポイント

がある。それは、常葉の都落ちの日付を二月十日とする点である。笠氏も指摘されているように、義朝の死を知らされたのが一月五日となつてゐるから、これでは一ヶ月余を、子供にとっては危険な都の中で、安閑とすごしたことになる、奇妙な感をぬぐえない。後日捕縛された常葉の母は、「左馬頭討れぬと聞えし朝より」娘と孫は行方不明であると陳じてゐるが、この方が自然である。また、義朝が都落ちの途次、金王丸を使者として常葉に伝えた伝言では、「ふかき山里にも身をかく」すようにと命じており、更に、義朝の死を報告した一月五日の金王丸の言でも、「此事、をそく聞しめされ候なば、たち忍ばせ給ふべき御事もなくて、いかなる御大事にか及給ひ候はんずらん」と思い、馳せ参じたように語られてゐるのであり、これらとの関連からも、二月十日の日付は腑に落ちないのである。自然の描き方にも問題がある。

比は二月十日の曙なれば、余寒猶尽せず、音羽川の流も氷つゝ、嶺の嵐もいとばげし。道のつらゝもとけぬがうへに、又かきくもり雪ふれば、行べき方もみえざりけり。

当時の二月中旬の氣候として、右の自然描写は果して適當であろうか。西行の「願はくば花の下にて春死なむ その如月の望月のころ」という歌を思い出すまでもなく、今日では三月下旬に当る氣候が、これほど苛酷であつたとは思われない。そして、二月十日という日付が、本来は夫の死を耳にした一月上旬の某日だったと仮定すれば、上述の疑問点は全て解消することにならう。ここにも、『平治物語』に採取される以前の仮称「常葉物語」の存在が想定されるのである。

では、何故『平治』作者は日付を変えたのであろうか。それは、捕縛された頼朝の助命話と常葉母子の助命話を相互に関連させて、並列的のものがたろうとした構想によるものであったらしい。常葉が我が家から出奔したのは二月九日の夜であり、その夜は清水寺で通夜し、翌日都落ちすることになるのであるが、その九日は、生捕られた頼朝が京の都に着いた日でもあった。物語は、頼朝の九日着京記事から遡行して、彼の生捕られるに至る経緯を記し(Ⅰ)、ついで常葉母子の都落ちへと話題を転ずる(Ⅱ)。

都落ち記事の後には、池禅尼の尽力による頼朝処刑延引の記事が入り(Ⅲ)、常葉の六波羅出頭記事へと続く(Ⅳ)。最後は、頼朝の助命がなかったことにより、常葉母子の死罪も有免されたと結ばれるのであり、頼朝と常葉の話を交互に配置し、最終的に両者を結びつけている構成は明らかである。このような構成の真意は、頼朝の助命は八幡大菩薩の、常葉母子の助命は清水観音の、それぞれ神と仏による冥助の賜であったと語りたいところにあるのであろう、二つの話は次のようにして結び合わされる。

常葉、一日片時も命のあるこそふしぎなれ、これさながら清水の観音の御助なりと、たのもしくて、わが身は観音経をよみ、子共には観音の御名をおしへて唱へさせけり。兵衛佐が死罪の事、池殿やう／＼に申されければ、死罪ゆるされて流罪にぞ成にける。是、直事にあらず、八幡大菩薩の御はからひなりと、信敬極なし。

頼朝の場合は、処刑が延引されている時にも、「八幡大菩薩おはしましけり」と思ったと記されている。一方、常葉の場合は、

危険を冒してまでの清水参詣に対して、「観音もいかに憐給ふらんとぞ覚えし」と語られ、寺僧に向って言う彼女自身の言葉も、「今は仏神の御助ならでは、又たのもしきかたも候はず。観音にも能々申給へよ」というものであった。伏見の里で心優しい老婆に宿を借りえた時には、「直事とも覚えす、偏に清水の観音の御あはれみなりと、行末もたのもしくぞ思」うのであり、六波羅出頭に先立って訪れた旧主九条女院邸では、女房達から「仏神、定て御憐あらんずらむ」と慰められる。前述したように、「平治」作者は彼らに対する神仏の加護に重点を置いて語るのであり、それは、やがて訪れる源氏の世が、神仏の意志による必然であったことを暗示する為の方法であったのだらう。頼朝が打倒平氏を祈念し、平氏の郎等が常葉母子の助命に不安がるといった叙述が、そのことを証明している。もっとも、常葉譚では、清水観音の影が濃厚で、それなしにはストーリーの展開がありえぬことを思えば、『平治』作者の手を経る以前から、観音の加護が話の核となっていたに相違ない。

次に、二月九日を両話の起点としたことの意味が問われなければならないが、事は明瞭である。『清辨眼抄』所引の『後清録記』によれば、近江国でつかまった頼朝が上洛したのは、事実、二月九日戊午の日であったからである。この動かし難い史実を知っていた『平治』作者は、自らの構想を生かすべく、その日に合わせて、常葉譚の方の日付を変更してしまつたのであろう。為に、前述の如き不自然な叙述が生じたものと思われる。常葉譚が『平治』に取り込まれた過程は、このようにかなり鮮明にうかがい知

られるのである。

○

『平治』作者が仮称「常葉物語」を自らの作品にはめ込んだ際、造作を施したのは日付だけのことではなからう。例えば、男児三人を助けおくことの不安を述べる平氏郎等の言葉などがそうであろうが、前掲(一)の部分も可能性が高い。義朝の使者となつた金王丸が主君の東国落ちを常葉に伝える場面であるが、三点ばかり気になる点がある。

第一は、金王丸の報告を聞いた今若の、「われはすでに七になる。おやの敵うつべきとしのほどにあらずや。をのれが馬のしりにのせて、父のましますところへ具してゆけ。速よものがれじ。具して行事かなはずは、平氏の郎等が手にかゝらんよりは、をのれが手にこそかゝらめ。いかにもなしてゆけ」という言葉が、後に描かれる今若像や子供全体のイメージとそぐわない点である。例えば、伏見の老婆宅で、深夜、明日の命も危ういことを母から聞かされた時の彼の問いかけ「さてわれしなば、母、何となるべきぞや」や、母も一緒に死ぬだろうとの答えに「母にだにそひてあらば、命惜からず」と応じた言葉に比べ、この今若ははるかに凛々しいのである。また、六波羅出頭の直前に訪れた九条女院邸での子供の描写「子供も又、武士の子とも覚えず、みな右へむく。むざんげなるかはばせ也」(傍点筆者、以下同)、六波羅邸での描写「子供は又、たのもしからぬ母をたのみて、手にとり付て見あげてなく」とは異なつて、武士の子としての自覚にたけた早熟な子供像であることも明らかであろう。第二の点として、笠氏

が言われたように、金王丸は主君の死の知らせを持って常葉と再度会っているにもかかわらず、後の叙述中に、この時の面会を匂わせる表現が全くないことである。第三に、金王丸が辞去する時の常葉の言葉「頭殿の行多をとへば、をのれが名残さへおしきぞや」が、再びまみえた際の「頭殿の名残としては、此童（金王丸）ばかりこそあれ」とニュアンスを通じており、或いは、後者の場面から発想を借用したのではあるまいかと思われる点である。

これらを考え合わせると、(一)の部分は、常葉の話を本格的に始める前段階として、新たに設定されたものではなかつたらうかと推考されてくるのである。常葉譚を取り入れた『平治』作者は、明らかに源氏の天下掌握という事実を知っていた。だからこそ、今若像にも武士の子としてのたくましい姿を描き込みたかったのであるが、しかし、それは、あくまでも幼くかわい子供を命がけで守ろうとする母の懊悩を主題とする仮称「常葉物語」の性格とは、相容れないものであつたと言ふべきであらう。

○

常葉譚の文末は、七五調で結ばれる傾向が強い。学習院本の中巻では、七五の文末が全体で36例あるが、そのうち常葉譚が20例を占め、下巻では同じく22例中の9例を占める。中巻の20例は18例までが(三)の都落ちに集中、下巻の9例は四の六波羅出頭部分にある。(四)の巻全体に占める分量は、それぞれ、未刊国文資料刊行会本⁽³⁾にして、36頁半中約7頁、32頁半中約5頁半で、おおよそ五分の一、六分の一の割合である。多言を要するまでもなく、七五文末は両箇所が高い頻出度をほこり、中でも(三)は特別というこ

となる。更に、七五の崩れである八五、七六の文末をも数えあげれば、常葉譚の文体面における特殊性は一層明白となる。

七五調への傾斜は、常葉の話が抒情的な語り物として享受されていたことを想像させる。安部元雄氏「一類本『平治物語』の基礎的問題(一)」(茨城キリスト教大学紀要・2)昭43・11)や笠氏前掲論文、同氏『平治物語研究・校本篇』(桜楓社・昭56)は、主要な古態本である学習院本・陽明本・松平本の校合の結果、常葉譚の部分が他の箇所比べて揺れの大きいことを明らかにしている。この揺れも、独立した語り物であったが故のものと考えられる。また、(三)(四)の各々に独立性があることは前述(43頁)したが、両者間に七五文末の頻出度で差があることは、両者が分けて語られていたことの徴証とも受けとれる。

ところで、常葉の話を読みはぐしていく時、誰しもが感じる一つは、女性話としての性格の濃さであろう。主人公が女性であることは無論、彼女を救うのが伏見の里の老婆であり、自首に際して温情を与えるのも九条女院という女性である。六波羅出頭を決意したのは、年老いた母ゆえであり、母は母で彼女の為に犠牲となる覚悟であった。この話の主要な人物は、子供と清盛を除いてことごとく女性なのである。成田守氏「常盤御前」(『解釈と鑑賞』昭41・11)が常葉伝承と桂女との関係を想定し、鈴木氏の前掲論文が女性の語り手を想定する点でそれに賛同を示しているのは、このような性格によるものであった。女語りの可能性が大きいことは、後述するところとの関連で、記憶にとどめておいていただきたいと思う。

二

『看聞御記』応永三十二年(一四二五)十一月四日条の「常盤絵」に関する次の記事は、今までの本文分析からの帰結に、一つの傍証を与えることにはまいまいか。

抑真乗寺殿、常盤絵二篇賜之。殊勝絵也。詞筆跡、白河三位経朝卿云々。行豊見之、彼卿筆跡之由申。此絵、真乗寺所持云々。

すでに別の機会に述べたように(『日本絵巻大成・平治物語絵詞』中央公論社・昭52の解説)、詞書の筆跡を世尊寺経朝(一二一五～一二七六)の真筆と、彼の五代の孫に当る行豊が鑑定していることによって、この絵巻は十三世紀中葉に制作された可能性があるものであり、勿論、同書に見られる叡山秘蔵の「平治絵」とは別種であった。絵巻の世界でも早くから、常葉の物語の作品化が、『平治物語』のそれとは別個に行なわれていたのである。ここでは、絵巻を所蔵していた真乗寺について若干の説明を加え、補説したい。

真乗寺は、後醍醐天皇の皇女権子内親王(光厳院後宮・宣政門院)の開基になるものらしい。『臥雲日件録拔尤』寛正元年(一四六〇)五月七日条に、「真乗寺開山梅溪。乃後醍醐天王之女。始為光厳院皇后。後自剪髮為尼、受開山(夢窓疎石筆著注)衣法云々」とあるからである。臥雲は疎石の孫弟子に当るので、右の記述の信憑性は高いと言えよう。彼女の出家は暦応三年(一三四〇)五月二十九日のことで、『師守記』の翌日条に、仁和寺河窪殿で剃髪し

たとある。疎石の知遇を得たのは、後日のことであったのだらう。『看聞御記』の筆者後崇光院に絵巻を下賜した「真乗寺殿」とは、瑞室と号した人物で、院の淑母（父榮仁親王の異母妹）に当る。没したのは、正長二年（一四二九）二月二十日であった。その後、院の第四皇女かか子が出家、理延と号して、永享六年（一四三四）四月二十日に真乗寺に入る（いずれも『御記』より）。真乗寺は、代々、皇女の入室する由緒ある寺院だったのである。このことは、同寺に伝来された「常盤絵」の素性の正しさをしるばせ、行豊の鑑定と相俟って、経朝筆の伝に一蹴しがたい重さを与えることとなる。後崇光院は絵巻の愛好者として知られる。その彼が「殊勝絵也」と記したからには、詞書の筆跡も伝経朝にふさわしい気品と古色を帯びていたものと思われる。十三世紀中葉という『平家物語』を創造する気運に満ちていた時代に、独自に流布していた常業の話をもとに絵巻が作られたとする考えは、決して無理な推測ではないのである。

なお、「常盤絵二篇」とするのは「二巻」の誤りかと思うが、その「二」は、おそらく、都落ちと六波羅出頭とが別々に描かれた結果の「二」であつたろうことを、付言しておこう。

三

常業の物語が清水観音の利生譚として世に流布し始めたであらうことは、容易に想像がつくが、その背景に清水寺と女性との強い結びつきがあった点を看過してはなるまい。成立の問題に、この点から入ってみたい。

『今昔物語集』卷十六は、観音の靈驗利生譚ばかり三十九話を収め、当時の観音信仰に関する好個の資料を提供している。そのうち、女話が十話を占めており、次の巻に含む地藏靈驗譚三十二話での女話三話に比較すれば、観音信仰と女性との関連の深さが自ずから理解できる。寺院別では清水寺の六話が最も多く、それに長谷寺の三話が続くが、前者には女話を四話含むのに対し、後者には全くない。この傾向は、他の説話集を含めた調査でも大差ないものと考えられる。今、簡便な方法で、『日本説話文学索引』の「観音菩薩」の項目により観音説話を拾い出してみると、全部で一〇一話あり、そのうち、女性が主人公の純粹な女話は二十話、それに観音の女人化身話四話、観音に祈って女性を助ける話の一話をも、女性関連話として加えれば、計二十五話となり、四分の一が女話という『今昔』の場合と等しい結果が得られる。寺院別では、やはり清水寺が最多で十三話、次に長谷寺の十一話、京都六角堂の五話が続くが、女話に関しては清水の七話が突出しており、長谷は二話、六角堂は皆無である。更に『索引』に含まぬ『古本説話集』の場合は、観音説話十話のうち女話が四話で、清水観音の話は三話あり、二話まで女話である。元享三年（一二三三）に書かれた『清水靈驗記』（続群書・所収）も女話であった。

清水観音と女性との殊更な結びつきは、まず清水寺の縁起譚と関連しよう。その縁起譚では、坂上田村麻呂の妻・三善高子命婦の存在が意外と大きい。田村麻呂は妊娠した妻の爲に鹿を求めて東山に至り、僧延鎮に遭遇、深く帰依することとなるが、それを

聞いた彼女は、鹿を死に至らしめた自分を恥じ、「我が家ヲ以テ彼堂ヲ造テ、女身ノ无無キ罪ヲ懺悔セムト思フ」(『今昔』卷十一・三二)と決意し、「女官ヲ雇ヒ、諸ノ上中下ノ人ヲ勸メテ、其力ヲ令加メテ、金色ノ八尺ノ十一面四千手ノ観音ノ像造奉」ったという。藤原明衡作の『清水寺縁起』(群書・所収)にも「重相宗室三善命婦、壞運寢殿、建立仏堂」とする。即ち、清水寺の建立には、当初より女性、しかも妊婦が関わっていたのであり、それが女性の信仰を集める第一の所以であつたらう。その上、子安塔と呼ばれる三重塔が、女性信者の輪を広げていったようである。『清水寺縁起絵巻』(一一一七年作。『日本絵巻物集成』所収・昭4・雄山閣)には「中門是也の東に三重の塔婆俗呼稱子安塔あり」として、嵯峨天皇の時に皇子誕生を祈る立願が行なわれ、清水寺の靈驗が示されたので、天皇の弟葛井親王が勅命を受けて造立したものであると伝え、「しかしより以来、貴賤の婦女、渴仰洩からず、祈念の驗を得すといふ事なし」と記す。創建は承和十四年(八四七)といひ(統群書所収『清水寺縁起』、葛井親王は田村麻呂の娘春子を母として生まれた桓武天皇の皇子であつた。延慶本『平家』にも、事実關係は相違しているが、「二条右大將坂上田村丸御娘春子女御、懷妊御時、御座平安ナラハ、我氏寺ニ三重ノ塔ヲ組ヘキ由、御願ニテ建サセ給シ三重ノ塔……見安塔ト申ハ是也」(卷一「山門大衆清水寺へ寄テ焼ク事」とある。清水寺が女性の信仰を集めたのは、このような機縁に基くものであつたのだらう。

常葉の物語は、上述した如き地盤があつたからこそ容易に成立

し、流布もしていったものと考えられるのである。

清水寺には誓女がたむろしていた。このことは、常葉譚から女語りが想像されることと関わつて、大いに注目される。室町期の史料ながら、『蔭涼軒目録』文明十九年(一四八七)五月二十六日条、等持寺における納涼会の様を記した中に、誓女の存在を次のように記す。

宴酣□歌吹。建仁當紀綱韓座主、胸蔽之乞食、清水寺西門、女誓等學之。一座快笑。

酒盛りがたけなわとなり、歌がうたわれ、笛が吹かれる中、建仁寺の韓座主が、「胸蔽之乞食」(むねたたく)や、清水寺西門にいた「女誓」の物真似をし、一座の爆笑を呼んだといふのである。つとに知られていた事実であるが、これを基に考えを広げてみよう。

今日、文献の上で誓女の存在が認められる最古の例は、岡見正雄氏「誓女覚書」(『女子大國文』20・昭36・2)によつて指摘された『明恵上人伝記』、正しくは喜海作『高山寺明恵上人行狀』中の、「又先年出京之時、美福門前有一人盲女、歌云、當南天竺、有一小國云々」という一節のようである。同書の成立時期は、明恵の入寂した寛喜四年(一二三三)以降、作者の没した建長二年(一二五〇)以前とされ、作者喜海は明恵より五歳若いだけの同行の門弟であつた。従つて、その記すところは信憑性が高い。問題の記事は、建仁元年(一二〇一)と承元四年(一二一〇)間のことを記す中巻に含まれており、明恵が美福門の前で天竺の物語

を語る盲女に出会ったのも、おそらくその頃かと類推される。

岡見氏は前掲論文及び「琵琶法師と瞽女」(『日本古典文学大系 月報(和漢朗詠集他)』昭40・1)で、更に絵巻物に登場する瞽女の姿を紹介しておられる。それによれば、最も古いものは後白河院時代に原本が制作された『年中行事絵巻』の巻三と巻十三にある二例であるという。前者は鬨鶏の行なわれている境内の隅に鼓を持って坐る老女の図であり、後者は祭りでにぎわう神社で女達に囲まれながら、鼓を打つ女と扇を手に何か声高に話しているらしい女とが並んで坐る図である。但し、前者については「貧しい巫女」と解する見方もあり(五来重氏『絵巻物と民俗』P233、昭56・角川書店)、後者も扇の女は晴眼者かと思われ、瞽女とするのに全く疑問がないわけではない。同絵巻の巻八には、橋の上に市女笠の壺装束をした女が、物もらいの母子と共に後向きに坐り、人通りに対している図がある。鼓の所持が不明なのは残念であるが、そのよそおいは他の絵巻中の瞽女と同類であり、むしろ彼女が瞽女であるかも知れない。ともあれ、瞽女が存在が明恵の時代より更に遡りうるであろうということは、充分に顧慮されてよいだろう。

○

『藤涼軒日録』の記述は、清水寺西門と瞽女とが特別な関係にあったことをしのばせるが、狂言『瞽女座頭(清水座頭)』でもそのことが認められる。一人者どうしの瞽女と座頭が、それぞれ観音の加護を求めて清水寺に参詣、西門に行けば結婚の相手が見つかるという夢告に従って出向いたところ、お互いがその相手と

分って結ばれるという筋である。

この西門の東には、先に触れた子安塔があった(今では本堂の南、錦雲溪を隔てた山上にある三重塔をいう)。どうやらそれが、瞽女達を西門に呼びよせる一因であつたらしい。室町期には子安塔を素材にした二種の『子安物語』が作られているが、その一つに、「あるひは、しゆしやうにかはりて、めをやみ、子をうむ女を、たいらかにまはりたまふなり、さてこそ、めやみの地藏、こやすのちそうと申ておはします」(赤木文庫蔵『子やす物語』合室町時代物語大成「所収」)とあるからである。また、同物語の末尾では、その霊験を説いて、「つまなき人は、つまをもとめ、子のなき人は子をまうけ、ふつき、あいくわに、さかへたまふへし」と記すから、狂言『瞽女座頭』は明らかに子安塔への信仰を背景としたものであつた。清水寺西門は、瞽女達が自らの眼病治療を祈りつつ、子安塔に参詣する婦女子をあてに、生活の糧をも得る恰好の場所だったのである。

清水寺には、子安塔以外に、瞽女に限らず、広く盲人達を呼び寄せるもう一つの重要な魅力があつた。本尊たる千手観音の魅力である。『日本霊異記』下巻第十二話「二目盲男、敬稱千手観音日摩尼手、以現得明眼縁」は、一人の盲人が、千手観音の日摩尼手、即ち、千手観音四十手のうちの右の第八手で、火珠(日摩尼。日精摩尼とも)を持つ手の名を唱え礼拝して、眼が開いたと伝える。同話を採録した『今昔』巻十六第二十三話には、「千手観音ノ誓ヲ聞クニ、眼暗カラム人ノ為ニハ、日摩尼ノ御手ヲ可充シ、ト」とある。また、『私聚百因縁集』巻六第三話「表法師事」

は、母の盲目を観音に祈念して治した話の後に、「光明ナカラ
者ハ、日精摩尼御手ニオヒテスヘシトイヘリ」と記す。四国雲辺
寺にある寿永年間制作の千手観音像の胎内銘に、「目アキラカニ
シタマヘ」とあることも知られている（速水侑氏『観音信仰』P
239、昭45・壇書房）。千手観音を本尊と仰ぐ清水寺は、元来、盲
人の信仰を集める力を内在させていたと見られるのである。

南北朝期に書かれた『源成集』（下）に、文和四年（一二三五）
の東寺合戦の最中、清水坂で『平家』を語る烏呼な座頭もいたこ
とが記されていることは、場所がから注目し得る。折しも寛
一の活躍期に入っており、清水坂近くの八坂塔周辺には、後に八
坂流と呼ばれた琵琶法師の集団が生活していたことであろう。岡
見氏が「絵解のことなど」（『日本古典文学大系月報（歌合集）』
昭40・3）で紹介された『道成寺絵巻』異本の絵には、清水の舞
台で奏でる琵琶法師の姿があり、また、狂言『猿座頭』では座頭
が清水へ花見に出かけ、同じく『二人座頭』では「東山辺」で行
なわれる『平家』の演奏会に出かける舞台設定となっている。盲
僧集団に結びつくことされる盲目景清伝説も、深く清水寺と関わっ
ており、幸若舞曲『景清』は、清水坂の遊女のもとに一時潜伏し
ていたことや、清水観音の身代りを得て死をまぬかれたこと、
自らくりぬいた眼を観音のもとに復してくれたことなどを語る。
そして、今日では、境内の地主神社前（じしん）にある一対の立石を「めく
ら石」と称し、目を閉じたままで一方から他方へ歩くことができ
れば、願ひ事がかなえられると伝えられているところに、かつて
盛んであった信仰の痕跡をとどめているのである。

清水坂は非人の集団がいたことで知られる⁽¹⁸⁾。貧僧が清水観音の
計らいで、清水坂の乞食の長の娘と結婚し、生活の糧を得ること
ができるようになったという『今昔』巻十六第三十四話は、当時
の乞食達が組織化されていたことを示し、清水坂非人を訴えた寛
元元年（一二四四）の奈良坂非人の陳状は、その組織の実状をみ
ごとに伝えている（『鎌倉遺文』六三〇三、一五、一六号文書）。

また、女性の観音説話では貧女の利生譚が多いが、清水寺の場合
はその最たるもので、『今昔』の四話は全て、『日本説話文学索引』
から抽出した七話は六話までが貧女利生譚である。そこに、清水
観音の女性信仰と坂の実態との共鳴した姿がうかがわれる。常葉
を救ったのが伏見の里の貧女であったことも、故なしとはしない
であろう。そうした非人集団の中に芸能を事とする民がいたこと
は周知の事実であるが、清水坂の場合、『新猿楽記』中に出てく
る「坂上菊正」なる人物が、その片鱗を見せているように思われ
る。冒頭近く、当時の著名な芸人達にまじって、「坂上菊正は、
初めは冷じくして終りに興宴を増す」と紹介されている人物である
が、その「坂上」は京都の地名、即ち清水坂の上を意味し、田村
麻呂の姓にもなぞらえた芸名かと憶測されるのである。何故な
ら、彼の前後に登場する人物は、「県井戸の先生」「世尊寺の堂達」
「還橋徳高」「大原菊武」「小野福丸」と必ず都の地名が頭にかぶ
せられ、彼らの居住した場所を指していると考えられるからであ
る。そして、私は、清水坂にたむろした芸人達の中に、早くから
歌や語り物をする盲女がいたであろうこと、更には、彼女達によ
って常葉譚が語り出されたであろうことを想定してみたいのであ

る。

○ 常葉譚が清水寺に関係する盲女の語り物であったとすれば、常葉の落ちのびた先である大和国宇陀郡にあった盲僧座とのきずなが、新たに浮かび上ってくる。宇陀に多い常葉伝承と盲僧座との関わりを推測されたのは角川源義氏であったが(『源義経』昭41・角川新書)、その盲僧の座・宇多座は、興福寺一乗院の支配下にあり、清水寺も一乗院の筆頭末寺であった(『大日本仏教全書』所収「興福寺末寺帳」)。もっとも、宇多座については、大和に散在した盲僧座に関する唯一の資料である「一乗院文書」中の盲僧補任が、残念ながら慶安三年(一六五〇)九月以降のものしか残っておらず、いつ頃から存在したか明らかでない。が、一乗院支配下の大和盲僧座ということであれば、盲僧補任目録残欠の康正三年(一四五七)の項に、「百七十六年々成當年まで」とあることから、目録の記載は一七六年前から始まっていたものと考えられ、従って、座の存在も弘安四年(一八二二)までは遡れそうである。誠に不確かなものではあるが、常葉が歩いた清水寺から伏見をへて宇陀へという行程は、興福寺一乗院を媒体とした盲人のつながりを暗示させなくもないのである。

四

本稿では、『平治物語』の常葉譚が本来は独立した物語であつたろうことを確認、かつ、それが清水寺周辺で成立し、盲女の語り物として享受されたものではなかったかとする一つの仮説を提示

してみた。⁽²³⁾ 仮説を支える古い史資料の乏しさは否めず、不本意ながら推測を重ねる結果となったが、今後の史資料の発見に期待したい。

『平治物語』にとって、常葉譚を取り込んだということは、古態本に見る限り、作品全体の整合性をおかし、作者の姿勢の不統一性を如実にものがたる形となっているが、作品に大きなふくらみをもたらしていることは事実である。一方、常葉譚にとって、文字の形で後世に残されたことの意味は大きい。『平治物語』の流動展開の過程で作品の中に融合⁽²⁴⁾させられ、自らの文学性を少なからず失なっていたことも確かであろう。そのことを含め、常葉譚の独自に創りあげた世界については、稿を改めて論ずることにしたい。

注(1) 長沢レイ子氏「『平治物語』常葉説話の考察」(『語文論叢』3)昭50・5)。

(2) 氏は、観音の慈悲を讀める金刀比羅本の「三十三身の春の花」以下の句が、謡曲『花月』中の詞句と類似し、共に清水観音に対する讃嘆句であるところから、同本の常葉譚が清水寺の説教唱導と関連を有すると見ておられる。しかし、問題の句が鎌倉期以前には見当たらないとされているのは誤りで、延慶二年に書かれた『六代御前物語』にすでに見出せる。また、常葉の語りが九条女院皇子の周辺で誕生したのではないかとされているが、私は後述するように、成立の当初から清水寺と関連を有していたものと考えられる。未刊国文資料『平治物語(九条家本)』と研究』に翻刻されているが、本文は原本により、句読点・濁点を付した。

(4) 鈴木氏前掲論文に同様な示唆がある。なお、『義経記』にも、「九條院の常盤が腹にも三人あり。今若七歳、乙若五歳、牛若当歳子なり。清盛是を取って斬るべきよしをぞ申しける」とあることが注目される。

(5) 金刀比羅本では、日付は二月十日としながらも、清盛が頼朝の助命を決定し、その代りに新たに常葉腹の子供を探索し始めたという情報の下に都落ちすることとなっており、一カ月余の空白に不自然さはない。金王丸の報告中にも、身をかくすように勧める言動は見られず、捕縛された母も、「去九日夜」に家を出たと語っていて、矛盾はない。自然描写は、「余寒、なをばげしくして、雪はひましく降にけり」と短縮しており、極力、不自然さ解消しようとした努力が認められる。これらは、同本が常葉譚を作品の中に有機的に融け込ませようとしたことを表わしており、同時に、同本の常葉譚の後出性をものごたる。

(6) 金刀比羅本では九日に頼朝助命が決定されたことになっている。前注参照。

(7) 幸若舞曲『伏見常盤』では一月十七日の夜に清水で通夜、十八日都落ちとし、同『藤常盤』でも「正月十八日の雪の日をまよひくらして」とあるから、観音の縁日である十八日を都落ちの日であったとする伝承が存在したものとされる。『義経記』でも、『平治』同様、二月十日の都落ちとする伝本(田中本・赤木本〔義経物語〕・岩瀬本)がある一方、一月十七日に我が家を出奔したとする伝本も多い(天理本・阿波本・稻武本・橋本〔判官物語〕)。仮称「常葉物語」の日付が一月十八日であったとすれば、問題の自然描写も納得がいく。

(8) 原作者か、別人の増補作者かは定かでないが、序文を草した意識とは異なる意識に達した作者ではあったろう。

(9) 「思ふやう」「言ふやう」という柔和で口語的な表現が、

中下巻に七回使用され、そのうち四回までが(三)に集中し、(四)にはないことも参考となる。なお、七五調が目立つ箇所としては、他に重懲流罪の道行部分があるが、文末の七五は3例にとどまる。

(10) 「伝承文学研究・15」(昭48・12)の「幸若舞輪講・伏見常盤(二)」における福田晃氏発言。岡部真由美氏『平治物語』における常盤像の生成」(広島女学院大学・国語国文学誌・3)(昭48・12)等。

(11) 『長谷寺靈驗記』全五十二話では女話が九話で、頻出度から見て清水寺に及ばない。

(12) 岡見氏は「明恵上人伝記」よりとして仮名書きの本文を引用しておられるが、同書中には見出せない。「高山寺明恵上人行状」を誤まれたかと思われるので、ここでは、「高山寺資料叢書・明恵上人資料第一」(昭46・東大出版会)に収録され、今日の最善本とされる上山本によった。

(13) 永仁四年(一二九六)成立『天狗草子』の東寺南大門で語る瞽女、元享三年(一二三三)奥書の真光寺本『一遍上人絵伝』で路辺に休む二人連れの瞽女、十四世紀後半成立「石山寺縁起」の石山寺山門で語る瞽女は、いずれも市女笠の壺装束姿である。

(14) メトロポリタン美術館蔵「保元平治合戦図屏風」の常葉が清水寺の僧と泣きながら対面する図でも、西門の延長線上に三重の子安塔が描かれている。

(15) 統群書所収『清水寺縁起』では、東方に薬師、南方に釈迦、西方に阿弥陀、北方に弥勒をまつるとし、正徳元年刊「山州名跡志」には「三重塔婆西向、本尊千手観音二尺許、脇土地蔵、毘沙門天」と記し、今日では地蔵でなく、子安観音と称している。

(16) 注13の『天狗草子』『石山寺縁起』や「高山寺明恵上人行状」に見られるように、大門は瞽女のよく語る場所であ

つたらしい。

(17) 景清の清水坂譚伏の件は謡曲『大仏供養』とも一致し、

清水寺には景清爪形観音が残る。また、清盛が清水寺で目のぬけた夢を見たという『源平盛衰記』巻一の話の背景にも、同寺にまつわる目の信仰が考えられよう。

(18) 軍記研究の側から清水坂の非人集団に注目した論として、砂川博氏「長門本平家物語と『坂の者』」(『文学』昭

55・9)がある。

(19) 同書を取める『日本思想大系・古代政治社会思想』(昭54・岩波書店)の補注でも、「坂上は東山鳥辺野の傍」とする。

(20) 東大史料編纂所にある影写本によった。五四一号〜五七五号文書が盲僧の補任資料。

(21) 谷合侑氏「鎌倉時代における盲人の社会的地位(1)」(『盲教育』24)昭42・8)も同見解。

(22) 伏見の里が舞台に選ばれたのは、女性の参詣人が多かった伏見稻荷神社(近藤喜博氏「稻荷信仰」昭53・壇新書)があったからであろうか。そこは替女の活動する場でもあったろう。但し、常葉譚に稻荷信仰を匂わせる要素が見当たらない。或いは、「伏見」に「伏身」(身をかくす)をダブらせた結果かも知れない。

(23) 常葉に「御前」をつけ、常葉御前と言い慣わし始めたのは後代のことか(幸若舞曲に初見)と思われるが、水原一氏はその「御前」が替女につながると見ておられる(『平家物語の形成』所収「巴の伝説・説話」「替女考」・昭46・加藤中道館)。示唆的な発言である。

新刊紹介

矢島道弘著

『相反する情念―坂口安吾の世界―』

本書は、長年無頼文学研究会とともに歩んできた著者の、『悪鬼たちの復権』(昭五四年刊)に続く論文集である。「総論」たる前著をうけた「各論」として、約十年の間に発表された坂口安吾についての論考が改稿のうえまとめられている。

安吾は、多く時代のうねりの中で取り上

げられてきた作家である。いきおい、そこでの評価が片寄った——ともすれば浮薄な印象をすら与えかねない——ものに終わりがちであったことは否めない。

そのような中で、本書の特色は、安吾の文学を生み出した精神の固有性にスポットをあてつつけた点にある。「安吾には中庸というものがなく、二つの対立・相反する別個の位相が交互に生れるのである」と捉えた上で、著者は、安吾を貫く大きな流れとして夢想主義から現実主義への移行があったと指摘する。そして、「風博士」「吹雪物語」「白痴」「桜の森の満開の下」「夜長

姫と耳男」といった代表作に即してその流れを丹念にあとづけながら、タイトルにいう「相反する情念」の所有者としての坂口安吾像を浮き彫りにしていくのである。

新たな選集が出版され見直しが進められている今日、坂口安吾という「巨大で不可解な存在」を考えるのに一つの指針を与えてくれる一冊といえよう。

(昭58・3 近代文藝社 B6版 一七七頁 一五〇〇円)

〔中村良衛〕